

長和元	1012		9・9 〔故挙直朝臣男、以道上道、献馬四疋。是挙直朝臣存生時、依有所申奉者、出馬場、馳廐馬〕（関）	7・16 匡衡没す（小）
-----	------	--	--	-----------------

（注）

（関）―御堂関白記

（小）―小右記

（権）―権記

（紀略）―日本紀略

（世）―本朝世紀

（公）―公卿補任

寛弘元	2	3	4	5	6	7	三 条 8
1004	1005		1007	1008			1011
	東宮御給により加階 (正五位下?)				このころ 没するか ←		
5・3 二日の宣旨のあつた華山院の昭登・清仁二宮の親王宣 下の使をなす。禄を頂く(関)	3・26 東宮(居貞)御給の位記作られる(関) 東宮御給により加階「挙直正下」(権)		4・25 26 内裏密宴。挙直文人として参加。題「所貴是賢才」 (紀略・関)	2・9 夜半許、花山院崩御の由、道長に伝う(関)			12・16 (行成、道長より挙直抄する『日本抄』一帖を比較の ために借受く)(権)
6・17 輔尹任左少弁		3・4 道長東三条第花宴(関)	3・3 上東門第に於て曲水宴(関) 「殿上地下文人廿二人」 9・9 重陽宴(九月九日記)	2・8 花山院崩御(紀略)	6・7・28 具平親王没す(紀略・ 関・権)	7・1・28 伊周没す(紀略・公・ 権)	6・13 一条院讓位(紀) 三条院受禪(紀)
栄花物語 はつはな 参照					7・7・24 以言没す(紀略)		

5	4	3	
1003	1002	1001	
	敬位		
<p>1・14 早朝、左府減省の事で忿怒の気ある旨行成に伝う(権)</p>	<p>1・13 東三条院に於て行れてゐる伝法に入道中納言(義懷)に出給う由を挙直から示し送る(権)</p> <p>3・29 東宮殿上聴さる「散位挙直」(権)</p> <p>5・19 去る十六日甚雨中に行成の新牧童が、民部卿家の車宿に車を入れ怒らせた不始末の、後始末の使をなす(権)</p> <p>6・12 行成、今夜挙直朝臣宅に方違をなす(権)</p> <p>6・15 前弾正親王(為尊)薨去につき挙直を右將軍に召遣し宮の御事を示させる(権)</p> <p>10・23 行成の妻及び誕生の女兒夭亡により、東宮の御使として行成家弔問す(権)</p>	<p>2・3 行成結政中に權中將(源成信)の消息に出家の由を告げる夢を見て左府に参る、挙直応待す(権)</p> <p>8・3 今日巳剋、一御子敦康親王(定子腹)を初めて中宮彰子上御廬へ渡し給うという左府の意向を、昨夕挙直来り行成に示す(権)</p> <p>10・1 九日に行れる東三条院四十の賀のための殿上樂日記を挙直に写させる(権)</p> <p>12・29 挙直に仰せて以大炊属茨田義信為家令、以知家事不功保正為書吏、以内蔵允竹田利成為御監、以織部正忠範少内記則孝等朝臣、如旧為侍所別当(権)</p>	<p>12・13 行成兒子二人着袴の儀に奉仕。「殿上人饗利成……男子前惟弘、女兒前挙直、乳母二人料広信……」(権)</p>
5・15 左大臣道長歌合(権)		<p>8・23 輔尹任右少弁(権)</p> <p>10・9 東三条院四十賀</p> <p>栄花物語はつはな 参照</p>	

永祚元	正暦元	長徳元 5 ~ 2	長保元 4 3 2	2
989	990	995	996	1000
蔵人・主殿助 式部丞			三河守 従五位下	散位 <small>カ</small>
3・13 実資、参議として初著座。蔵人挙直を以て昇殿の慶びを奏せしむ（小） 5・5 復任除目に奉仕（小）	7・15 十一日に卒した実資女児の弔問す「右馬頭・大和守・前丹波守・挙直朝臣朝臣等来」（小） <small>実方</small>		1・25 任三河守（大間書）	8・10 「下参河国司申挙直、免除調庸率分文 <small>子細在</small> 目録」（権） 11・7 華山院の産穢のことを行成に伝う（権） 12・9 「参河国押領使源好官符令挙直朝臣送□朝臣許」
2・23 道隆内大臣に、実資参議に任ず（公）	7・11 実資鍾愛の女児卒す（小）	2・1・19 円融院葬送（紀） 同日輔尹任蔵人 （権記、寛弘八年十一月十一日条による） 4・2・28 輔尹「蔵人式部丞」と見ゆ（権）	2・1・25 為時任淡路守。28日任越前守（大間書） 3・1・23 源為憲「請レ被テ殊蒙レ天恩一依レ遠江国所レ済功并成業勞一拜中任美濃加賀等国守闕上状」奉る（粹）	

藤原挙直略年譜

年号	西暦	官職	事蹟・その他	備考
永観元	983 ～	文章生 蔵人所雑色		
(花山) 2	984	蔵人・ 大学少丞	10・17 任蔵人。「大学少丞藤原挙直 ^{所雑色} 」(小)	8・27 花山天皇受禪 藤原実資任蔵人頭 10・10 花山天皇即位 10・17 任蔵人。「左衛門尉藤原宣孝 ^{院判官代} 」(小) この頃藤原輔尹は大学助在任
寛和元	985	〃 〃 主殿助	4・20 齊王(選子斎院)の牛の件で参内した実資の取り次ぎをなす(小) 5・9 尊子内親王の薨去にかかる「除錫紵事」について、実資に伝う(小) 10・25 大嘗会御楔。殿上留守をつとむ(小)	
(一条) 2	986	蔵人 木工助	6・10 御体御ト奏に奉仕(世)	6・23 花山天皇退位 一条天皇受禪
永延元	987	蔵人・主殿助	1・8 任蔵人。「主殿助藤原挙直 ^{山院カ} 御時」(小、一月九日条) 蔵人	11・11 実資補蔵人頭
2	988	〃 〃	1・20 摂政殿大饗に内裏からの使として甘栗を持参す(小)	

られる。

（十三）「散位従五位上源朝臣為憲誠惶誠恐謹言 請レ被下殊蒙 天恩 依 遠

江国所レ済功并成業勞 并任美濃加賀等国守闕上状」（『本朝文粹』卷六）

（十四）「宮々御事」は、翌二十七日に行われた敦康親王御対面と脩子内親王著裳の儀をさす。

（十五）『大日本史料』では「挙直朝臣」としているが、不審。

（十六）台記十二月三十日条に「……関白息基実、叙正五位下一、聴禁色昇殿、任左近権少將一、……」とあり、正月二日に正五位下から正下の加階したところなので、正四位下の意である。

（十七）十卷本に「簪殿よりは皇女の宮の藏人の雑色藤原のたかただして」云々と見え、「瞿麦」題で「秋深く色うつりゆく野辺ながらなほ常夏に見ゆる瞿麦」の歌がある。

その時々々の役割に精励する姿の一端をのぞかせる記録から察することができる。

また文人としての足跡も決して華やかなものではなかったが、公任の『和漢朗詠集』撰に先がけて『日本抄』（或ハ我朝古来七言秀句）を撰んだことは当代詩人群に与える影響の少なかつたろうことを思わせる。

詩文が多く残らず、その力量を見ることのできないことは残念であるが、挙直は漢詩文人として、一条朝盛時のかげに慎ましく生き、その花やかな漢文界を支えた底辺的存在、その地下文人としての実力を認めて然るべきであろうと思う。それにつけても『江談抄』に伝える「輔尹挙直一雙者也。匡衡送書於行成大納言許云。為憲・為時・孝道・敦信・挙直・輔尹。此六人者、越凡位者也。故共甘貧云々」の、匡衡の言の意味するところが改めて思いおこされるのである。

なお、天禄三年（972）規子内親王歌合に見える「たかただ」^{（注十七）}について、萩谷朴氏は、南家貞嗣流、利博男挙直、或は式家宇合流斯生男孝忠、魚名流、永頼男、孝忠のいずれかをあてるのがふさわしい旨述べられる。挙直の経歴からすれば、年譜の如くで蔵人所雑色が永観元年（983）ころのことであるから、規子歌合（972）に見える「皇女の宮の蔵人の雑色藤原のたかだ」^{（注十八）}として、御果物のおろし」云々の「たかただ」が若し挙直とすれば十一年もの長い間蔵人の雑色であったことになり、またそれは寛弘八年に七十余才で没した為憲が「学生」のころのことなので、挙直と見るには少し無理があるうかと思われる。やはり規子歌合の「たかただ」は別人であろうと考える。

注

（一）『続本朝往生伝』一条天皇の項「文士則匡衡。以言。齊名。宣義。積善。為憲。為時。孝道。相如。道濟。……皆是天下之一物也。」

（二）「藤原輔尹考——詩文の人として、その経歴にかかわる問題点について——」（鹿児島県立短期大学紀要、第三十四号）

（三）『王朝歌壇の研究 別巻蔵人補任』（山口博著 桜楓社）では、「一条朝蔵人挙直の父」として、「村上・冷泉朝」と推定されているが、天曆十年頃能登守であったとすれば、蔵人であったのはそれ以前と考えられるから、少くとも冷泉朝蔵人では無かろうと考える。

（四）前掲書169ページ（清和朝蔵人岑人の孫）。

（五）『日本紀略』同日条「戊寅。召二秀才進士於弓場殿一。賦レ詩。」

（六）（七）『江家次第』卷十九「弓場殿試事」「醍醐 延喜二年十月六日 壬寅 山無レ隱^{（注十九）}毎レ句用二後。文章得業生藤原博文作二秀句一、補二蔵人所雑色一文章生藤原諸蔭毎レ句第一字用二逸人名一候二内所一。及第者二人。（頭書）及第者二人。今度初参者十人、不参者三人。挙直朝臣説云、博文候二内所一諸蔭補二雑色一。不参者文章生橘列相・菅惟熙・橘善延。」

（八）川口久雄「平安朝漢文学史の研究」「本朝麗藻の詩人群」参照。

（九）「挙直」を「業直」と誤写の例は『権記』長保五年正月十四日条にもみられる。

（十）類従本には「寛治」とあるが、すでに類従本の編纂時に「寛治ハ寛弘ノ誤歟」と忠宝により注記された通り、「寛弘」の誤りである。「丁未」の年は寛弘四年であり、為憲は寛弘八年八月に卒して「寛治」までは生存していない。

従ってここでは私に正して記したことをおこわりたい。

（十一）注（二）参照

（十二）日本古典文学大系『和漢朗詠集』解説「朗詠集の内容と原拠」の項。また、「公任以前に藤原挙直撰集我朝古来七言詩秀句も行れていたことを『平安朝漢文学史の研究』第十八章「寛弘期漢文とその特質」（その二）六三〇頁に述べ

信任のあつきを推測することのできる記事をもう少しあげておきたい。

寛弘元年六月九日、挙直は東宮からの使として、道長の重悩を見舞っている（『御堂関白記』）し、また寛弘二年三月廿六日条には次の如くあって、東宮の御給を賜っている。すなわち『御堂関白記』には

三月廿六日甲戌

早旦参内、前帥・大式等被免殿上、依明日宮々御事也。挙直朝臣春宮御給令作位記、仰内記宣義。

とあり、同日『権記』には

帥聴昇殿、挙直正下、左大殿被参、午時退出

とある。両文によつて、東宮御給の位記が作られ、挙直の加階のあつたことが知られる。しかし「正下」とは辞書類では「正四位下」の意としており、例に引かれる『源氏物語』『紅葉賀』の「頭中將正下の加階したまふ」、『台記』久安七年正月二日条に見える「正下少將事云々」も、確かに正四位下の意ではある。しかし挙直の場合三河守就任時、長徳二年大間書に、また『尊卑分脉』に「従五位下」とある以外に官位についての記載を見出しえず、寛弘二年現在の官位についてはわからないのであるが、たとえば従五位下の者が御給により「正下の加階した」とすれば、二階上つて「正五位下」に進んだことを意味するということでは無いのであろうか。挙直が正四位下の加階したと見るには如何に東宮の信頼があつたとしてもやはり疑問が残るように思うのである。ここでは疑問を提示するにとどめ、なお調べを進めてみたいと思う。

挙直の生存中の事跡として記録にその名が出る最後は、寛弘五年二月九日『御堂関白記』の、花山院の崩御を道長に告げた次の記事である。

二月九日 庚子

挙直申云、此夜半許、華山院崩者、門外広業朝臣来云、仰、華山院崩、御間雑事神事等如何云……………

この後寛弘六・七年には、その名は見出せず、寛弘八年十二月十六日『権記』に前述の『日本抄』を道長から借りうける条がある。即ち、前章にも記したが、^{（請方）}「亦申取挙直所抄日本抄一帖、而先日借給、為比校也」の一文である。本章で述べてきたとおり行成とは疎い間柄でも決して無かつたはずであるから、若し挙直生存中とすれば直接書物を借ることも出来たであろう。この時すでに故人となつていた可能性があるあるいはあろうかと思われる。また『御堂関白記』長和元年九月九日の条には

故挙直朝臣男以道上道、献馬四疋、是挙直生存時、依有所申奉者出馬場、馳厩馬

とあつて、息男が父挙直の遺志をついで道長に献馬した旨が記されている。記録類に見る道長とのかかわりは、前述の通りで、行成との連絡や「使」として命を果たしている等々であるが、生涯を通じて公的に、また文学面で何かと恩顧を蒙つたことであつたろう。献馬の志はそうした道長への感謝の志と想像する。

没年については明らかでないが以上の資料等からの推測で寛弘期末頃には世を去つたものではなかつたかと推測する。親しくお仕えた東宮、三条院の御即位まで生存しえたかどうかは疑問である。「二雙」といわれた輔尹とほぼ同年輩と見て、寛弘の末年ころには六十才前後で、世を去つたかと推定される。

六

以上資料をたどりつつ、挙直の文人としての、また官人としての、さらに長い散位時代の、足跡を見て来た。京官としては蔵人・式部丞をつとめ、また受領として三河守を経て、散位となつた。しかし東宮に仕え御給を賜わり、行成、道長にも信頼の度の大きかつた様子が、

仰。拳。直。朝。臣。以。大。炊。屬。茨。田。義。信。為。家。令、以。知。家。事。不。功。保。正。為。書。吏、
以。內。藏。允。竹。田。利。成。為。御。監、以。織。部。正。忠。範、少。內。記。則。孝。等。朝。臣、如
旧。為。侍。所。別。當、(以下略)

(『權記』)

ともある。行成家の家司の配置について拳直に命じているものではない
かろうかと思うのであるが。若しこの判断に誤りがなければ、拳直の
立場の推定される一文であるように思われる。

長保四年——三月廿九日条

今日人々東宮殿上云々、左近少將経通、右近少將雅通、少納言朝
典、散位拳直、帶刀長重季等也 (『權記』)

この日東宮(居貞)の殿上を聴されているが、拳直が三河守の任終
えて以来散位であることがここに明らかにになる。

同、五月十九日条には

(略)藤相公被示、去十六日、汝車依甚雨、立民部卿家車宿、仍
民部卿怒云々、聞驚、婦家令尋問、彼日相從男等、新牧童醉中所
作、即被召捕、為使拳直奉送、被返送、即追放

などとあつて、行成家家臣の不始末を使として片付けたり、また、六
月十二日条には「今夜於拳直朝臣宅違方」ともあり、同十五日には為
尊親王薨去による奉仕をなし、十月廿三日、行成の妻及び誕生の女兒
を失ったことに対する東宮からの弔問の使をつとめている。等々すべ
て『權記』の記事によるものであるが、行成家とのかかわりの深さが
推察できよう。

五 寛弘期

寛弘元年五月二日・三日の『御堂関白記』に次の記事がある。

五月二日乙酉

華山院宮達可為親宣旨、実成朝臣来仰言、依有被申院、雖不宜
母、被下宣旨、冷泉院五六宮者

同 三日 丙戌

以拳直朝臣令申事由彼宮、有禄、

冷泉上皇皇子昭登・清仁の二人を親王と為すにあたつてのことであ
るが、この二人は『日本紀略』に「実花山院御出家之後産出也」(寛
弘元年五月四日条)と言うごとく花山院の皇子であつて、花山院の切
なる願いで道長の配慮により親王宣下が実現したのであるが、皇子を
親王となす宣旨を伝える、宮への使を拳直がつとめたというわけであ
る。この二日・三日の記事は、『栄花物語』「はつはな」に次のよう
に記され、『栄花物語』では「使」とのみあるが、拳直の果たした
「使」に対する花山院の狂喜する姿がおもしろくえがかれている。参
考までに引いてみよう。

花山院は冷泉院の一のみこ、ただ今の東宮は二の宮、故彈正宮は
三の御子、今の帥宮四のみこにぞおはしますかし。されば内に参ら
せ給て、事の由奏せさせ給て、吉日して宣旨下させ給ふ。親腹の
御子をば五の宮、女腹の御子をば六の宮とて、おのおの皆なべて
の宮達の得給ふ程の御封ども賜らせ給ふ。国々の御封とも分ち奉
らせ給て、宣旨下りぬる由、殿より院に申させ給へれば、物に当
らせ給て、御使に何をもくとり埋みかづけさせ給ふ。御使帰
り参りたれば、殿おはしまいて「ものよかりける真人かな。いみ
じう多く物を賜りたる」とぞ笑はせ給ける。

さきに、長保四年三月廿九日条(『權記』)に「東宮殿上」のことが
みえ、「散位拳直」も殿上を聴されたこと、また長保四年十月二十三
日、行成妻子の逝去に対して拳直が東宮恩問の使をはたしたことを記
したが、後に「三条帝」となられた居貞親王との深いかかわりを示し

一条朝へと遷った。当然のことながら挙直は花山朝の藏人としての任は解かれた様子で、翌寛和三年（四月五日永延と改元）正月八日には、再び一条朝の藏人に任じられたことが『小右記』正月九日の条に見える。藏人主殿助である。——永延二年正月二十日、摂政（兼家）殿大饗に際しては内裏からの使をつとめ（『小右記』）、永延三年（永祚元年、八月八日改元）三月十三日には、参議に列した実資が初めて宜陽殿に著座の後、藏人挙直をもつて昇殿の慶びを奏上せしめている。以上が記録に見る藏人としての確かな活躍である。ところが同年五月五日に行われた復任除目には「式部丞挙直」として奉仕している。その様子は『小右記』に詳しいが、前記の実資昇殿の慶びを奏上した三月十三日以後、五月五日までの間に藏人を下り、式部丞の任についたものか、または藏人式部丞に任じたものか、なお明らかではない。

挙直の藏人時代、実資は、永観二年八月二十七日、寛和二年六月二十三日に至る花山朝を、円融藏人頭から引き続き頭をつとめ、一条朝に入って再び永延元年十一月十一日、永祚元年二月二十三日に参議に任ずるまで、藏人頭の職にあった。挙直は藏人時代を通して殆んど実資を上司と仰いでいたことになる。この期間『小右記』に挙直の名がしばしば記されているのも、こうした縁によるものなのであろう。

永祚二年七月十一日、実資の女兒が卒した時にも殿上人、僧侶らの弔問にまじって右馬頭実方・大和守・前丹波守為頼らと共に挙直も訪うている。

この後記録は正暦年間五年ほどの跡絶えがあつて、その間の動行はわからないが、長徳二年正月二十五日付けの大間書に、挙直の三河守任命の由が見える。

『尊卑分脉』によれば「信濃・三河守」とあるが信濃の守に任じた時期については記録もなく全くわからない。ただ想像を逞しくすればあるいは記録類から全くその名を見出すことのできない正暦年間こ

ろにその可能性があるのではなからうかとも思われる。前述の「式部丞」が若し藏人式部丞であつたとすれば、あるいは花山朝から一条朝へかけての六年間の藏人期間を終えて、順爵して地方官となつたとも想像されなくもないが、なお、その間の事情は明らかではない。

三河守在任中の動行についても記録が無く全くわからないが、挙直たちが任ぜられた翌年の長徳三年正月、前年の除目にもれた為憲が奉った奏状の中に

去年正月除目。道路謳歌。多美皇化。其中参河守藤原挙直。越前守同為時。各任所望之国。是則其一也。彼為時等。若以二

と記されているところから、希望のこなつた任務に精励したものと推測する。そして任期の四年をすでに幾月か過ぎるころの長保二年八月十日、『権記』に次のようにみえる。

次詣右府、下参河国司申挙直、免除調庸率分文子細在

ここではまだ在任中の感があるが、十一月七日条に表れる時には在京しており、八月から十一月の間に三河守の交替が行れたものと推測される。なお、同長保二年十二月九日には

参河国押領使源好官符令挙直朝臣送□朝臣許（『権記』）

ともあり、欠字のため名はわからないが、恐らく任を受け継いだ□朝臣の許に、前任者としての事務を執っているものと思われる。

以後『権記』にしばしばその名がみられ、行成との密接な間柄——あるいは家司的存在が考えられるのではないかとも思っている。

長保二年——十二月十三日条、行成の子女の着袴に奉仕。長保三年

——八月三日条、一条天皇第一皇子敦康親王の中宮彰子のもとにはじめて渡御するについて、左府の気色を行成に伝え、十月一日条、依頼により行成の献上する東三条院四十の賀のための殿上楽日記を行成の命によって写す等々。また十二月二十九日条には、

亦申取^(請カ)挙直所抄日本抄一帖、而先日借給、為比較也

傍点部、道長所蔵の挙直の抄した『日本抄』一帖を、行成が比較のために借りうけた旨である。

恐らくはさきの「我朝古来七言詩秀句」一卷の転写本で、『日本抄』と呼びならされるにいたったものでは無かつたか、と考える。

道長の所蔵本であり、行成が自分の書写本との比較のために借りうけているところからすれば、相当広く詩文に関心ある人々の間で書写され、流布し珍重されていたことを思わせる。

秀句の摘記類聚は詩学入門の教科書的作用を荷って利用されていた。中国にならい我国でも古くは『文鏡秘府論』の中に五言詩句の佳句の部類があり、また『千載佳句』が編まれたこともよく知られているが、これらは中国詩人の佳句を撰んだものであった。本朝詩人の作品から佳句を抄出することも、やがて多く行われるようになり『本朝書籍目録』には明衡の『本朝秀句』をはじめ、『日本佳句』『本朝佳句』『続本朝秀句』等々、多くみえている。

挙直の七言詩秀句または日本抄の成立は何時であろうか。寛弘四年秋八月の『世俗諺文』の序文に「去夏古僕為憲賜参州前刺史藤卒直撰集我朝古来七言詩秀句一卷」とあるところからは、寛弘四年夏以前の成立は確かであり、『本朝麗藻』や『和漢朗詠集』の成立に先がけて成立流布したことは明らかであろう。『本朝書籍目録』にみえる『本朝佳句』が『本朝書籍目録考證』に言われる和田英松氏家蔵本の「江維時所輯」との註記通り維時の撰になるとすれば、それはまた別格としなければならぬであろうが、挙直の撰集は、この種の撰集としては早いものに属しよう。川口久雄博士は公任が『和漢朗詠集』を撰ぶにあたって多くの本朝の文章が何らかのかかわりを持ったと思われるが「明衡の本朝秀句、挙直の七言詩秀句のたぐい、維時が撰したかと

思われる本朝佳句のごときものが何らか公任の坐右にあったかと思われる」と述べておられる。^(注十二)

以上限られた資料での考察であるが、残る作品は極めて少ないものの、当代の地下の文人として秀れた存在であったことが認められよう。

四 永観―長保まで

挙直の生涯について、その経歴をたどりながら通観してみたい。挙直が文章生出身であることは前述したが、その間のことを物語る資料は皆無である。記録類にその名の見える最初は『小右記』永観二年(984)十月十七日の条、花山天皇の即位後間もない「天皇始臨二万機」(『日本紀略』)の日のことである。すなわち

十月十七日癸巳(略)還御本殿之後、召左大臣於御前、被定藏人等、大学少丞藤原^{所藏}挙直^{院判}、左衛門尉藤原宣孝^{宣代}、左大臣自御前還御之後、賜定文於下官、予令書宣旨、子終退出

とある。挙直はこの日、藏人所雑色から藏人大学少丞へと進んだのである。そしてこの日から花山朝の藏人としての活躍が始まる。

翌寛和元年四月廿日には、斎院の牛車にかける牛のことで参内した実資への応待に出、十月廿五日、大嘗会御楔の日に殿上留守をつとめた時には主殿助を兼ねていたようであり(『小右記』)、また寛和二年六月十日、御体御卜奏には藏人木工助として奉仕している(『本朝世紀』)。

そして六月廿三日

庚申。今晚丑剋許。天皇密々出禁中。向東山華山寺落飾。

于時藏人左少弁藤原道兼奉從之。先于天皇密奉劔璽於東

宮。出宮内云々。年十九 (『日本紀略』)

とその間の事情の記されるごとく突然の花山院の出家により、御代は

匡衡朝臣講文、此間王卿殿上人近候、召人候砌下、講了復座（中略）文人為憲・孝道・善言・弘道・以言・業直^{（筆力）}・輔尹・為時・敦信・通直・宣義・積善・時棟・忠真・頼国・義忠・章信等立座退出（以下略）と、記録にみえる。

「大日本古記録」本に「業直^{（筆力）}」と注する如く、「業直」の「業」はその草体「業^{（筆力）}」と「挙」の草体「業^{（筆力）}」の類似による誤読誤写であらう。因みに『尊卑分脉』にも「業直」なる人物は見あたらない。

また可能性としての詩宴参加を推量してみると、前述の皇居詩宴の少し前に行われた上東門第における曲水宴がある。『御堂関白記』寛弘四年三月三日条によると、式部大輔輔正・新中納言忠輔の出題「因流汎酒」、序者匡衡、講師以言。齊信・公任・俊賢・有国・行成・経房らの他、「殿上地下文人二十二人」が参加している。上下の文人の参加から考えれば更に前年の寛弘三年三月四日道長の催した東三条第花宴、また寛弘四年九月九日重陽宴（寛弘四年九月九日記）などへの参加があるいは考えられないであろうか。挙直は三河守を長保二年ころその任終えて以後、ずっと散位であつたらしいことも、その動行にいま一つ明確さを欠く一つの原因でもあらう。

次に注目したいのは源為憲の著した『世俗諺文』の序文に、挙直についてふれていることである。周知の如く『世俗諺文』は道長の嫡子頼通（寛弘四年当時十六才。左少将。春宮権大夫）のために著したものである。少し長くなるが冒頭から挙直にふれた所まで抄出してみよう。

叙日。鳳凰之雛。雖有翼。漸習于飛。騏驥之駒。非無蹄。猶学馳騁。物既有之。人亦宜爾。舊事府員外端尹。富于春秋。好以文学。当斯時也。天下之士。陪家君左相府東閣者衆焉。殆如周公旦

之日見七十人也。或尊為師。其讀書也不改函丈之礼。或謙如友同誦句也。令交振之声。於是各抄詩書。彌勸鑽仰。『去夏古僕為憲賜參州前刺史藤卒直撰集我朝古来七言詩秀句一卷。命曰。可加遺漏矣。僕避席揖曰。挙直本孔門之藤雄已其人也。假令新撰他文。難下雌黄矣。』

端尹適客一門言侃々如也。間々如也。其後竊思。老爛目昏閑散心嬾遁。抄写役。豈不悅手。（以下略）
「寛弘（治）四年丁未歲秋八月十七日 散班散大夫 源為憲序」と記す。

今、問題としたいのは便宜上『』を付した挙直にかかわる部分である。拙稿『藤原輔尹考』^{（注十）}でも扱ったので重複するが大意をとれば「去ぬる夏、三州前刺史挙直の撰する我朝古来の七言秀句一卷を主人が下賜されて、遺漏を補うべく命ぜられたが、私は席から飛び退いて申しました。『挙直はもとより文筆における藤氏のすぐれた存在でございませす。たとえ新しく他の文を撰び出しましょうとも、挙直の撰びに雌黄を塗って書き改めることはいたしかねます』と」の意であろう。現存しないが、挙直の撰んだ七言秀句一卷のこの時点にすでにあったこと、そして源順の門人で当代の和漢の学に秀でた為憲をして「挙直本孔門之藤雄、已其人也」と、高い評価の与えられていることは、挙直の学問的評価にかかわる重要なことである。

さて『権記』寛弘八年十二月十六日条に、前述した挙直の「我朝、古来、七言詩、秀句一卷」と同一書の写本のことを指しているのではないかと思われる次の記録がある。

十二月十六日乙卯

早朝参左府、奉返上後撰倭歌集上帙、此集去年院御在位時、被仰為本可写進之由、所下給一部、且書十二卷、付藏人頼国令献上新写（中略）

である。挙直の言の「毎^レ句第一字用^レ逸人名」。才有^二余力^一也」との帝のお言葉を賜ったという諸蔭の詩が現存しないので残念であるが、挙直の主張する「所蔵色」云々はともかくとして、文章生諸蔭の詩文力の程を、前述の大内記に撰ばれる族の「才幹名譽」と相俟って、窺い知る援けとはなろう。

祖父諸蔭の才幹の程は挙直にとって誇るべきものであったのだろう。なお、以上の事々から延喜二年文章生だった諸蔭の蔵人時代は、「光孝・宇多朝」とは考えにくいことを付記しておきたい。

詩文は残らないが、前述したように父の利博も文章道の出身であり、叔父の博雅も又同様である。母方については全くわからないが、父祖の文学的資質を受け継ぎ、学問的環境の中に育まれた挙直は、当然の如く文章道に進んだものと推察される。

三 文人としての挙直

輔尹と「一雙のもの」と、時の碩学匡衡から評された挙直の、詩文の人としての資料は少ないが、そのすべてを挙げて考えてみたいと思う。

先ず現存する詩句は、ただ一首のみ。『類聚句題抄』に「絃歌伴^レ月来」の題で入っている。すなわち次の句である。

彈雪曲中乗雪到
貫珠音底对珠行
輝将峡水相和進
影与梁塵挙動迎

同題の詩は『本朝麗藻』巻上「夏」に右金吾（藤原齊信）の一首があり、『類聚句題抄』には、同齊信の詩の三、六句に至る句をはじめ

として大江以言、源為憲、源孝道、三善為政、菅原宣義、藤原為時、そして挙直の句を見ることができる。齊信以下宣義に至る面々は詩文にかけては当代の錚々たる顔ぶれと云うべきであろう。詠作についての日時や場所については今のところ皆目わからないが、察するところ禁中か、若しくは道長邸か、然るべき場所での詠作と思われる。また藤原齊信の作者名が「右金吾」と記されている年代の作とすれば、齊信が長保三年十月三日右衛門督に任じ（^{〔公卿補任〕}）てから寛弘六年三月四日右衛門督を辞して権大納言に任ぜられる（^{〔公卿補任〕}）までの間の夏の夜の詠作と、莫然とみられるのみである。若しそうとすれば挙直はすでに前三州刺史と称されるようになってからの作ということになる。ただ、ここでは作品の多くは残らない挙直にも、これらの錚々たる文士たちと同座して詩を賦す場のあったことに注目したいのである。というのも、『二中歴』第十二「詩人歴」の文章生の項に挙直の名が上っており、また同じく「本朝麗藻」詩人群の中にも挙直の名を見出すからである。『本朝麗藻』は完本が今日伝わっていないので、挙直も麗藻詩人でありながら現存本ではその詩文を見ることができないもの（^{〔注八〕}）の一人である。

なお、明確な詩会への参加は、寛弘四年四月二十五日・二十六日に行われた一条院皇居詩宴への参加である。その日の様子については、『日本紀略』二十五日辛卯

於一条院皇居命詩宴、題云 所貴是賢才、公卿以下属文之輩多獻詩、題者 權中納言忠輔卿、序者文章博士大江以言、講師東宮学士匡衡、又有音楽、

『御堂関白記』二十六日壬辰

辰時献序、此召人等献作文、依迎令取文台筥、右近少将洛政朝臣以筥置座上、依召参御前、召御園座鋪大床子南、御之、可奉仕講師

の中に「散位藤原朝臣岑人……從五位下」（『三代実録』）との名を見出すところから、諸蔭はその岑人の孫に当るので、山口博氏^{（注四）}によれば「光孝・宇多朝」の藏人であろうと推定されている。私は以下に述べる諸事から『醍醐朝』の藏人ではなかったかと考えている。またその経歴の中に「式部少輔」とあることも併せて、その経歴について考察してみよう。

『本朝文粹』所収、藤原篤茂の天禄四年正月十五日付奏状「請_レ被_下殊蒙_一 天恩_一拜_中大内記紀伊輔、木工頭源方光申_二他官_一所、并淡路国守闕_上状」に

抑非_一儒士_一任_二大内記_一者。延喜聖代藤原諸蔭是也。

とみえ、また、文室真人如正の寛弘九年十月廿日付奏状「請_下殊蒙_一天恩_一因_レ准先例_一兼_レ任式部大輔闕_上状」に

經_二文章生_一者。兼_二任件官_一例

源 保光 安和二年任大輔_{本官右}

藤原諸蔭 延喜五年任少輔_{本官大内記}

藤原興範 延喜九年任大輔（以下略）

（傍点筆者以下同）

とあることによって、延喜五年頃にはすでに大内記の任にあつて、式部少輔を兼任するに至つてゐることがわかる。前者の「非_二儒士_一任_二大内記_一者」であることは『官職秘鈔』には「諸道官、紀伝」の「大内記」の項に

多用_二大業人_一。或有_二文章生_一任_レ之例_一。諸蔭是也。或有_二六位内記_一留例_一。保胤是也。又有_二二人相立_一例_一。_{朝綱と橘好古}凡授_二此官_一。輩殊被_レ撰_二才幹名_一。 _{俊生と金茂}

と言うごとく、相当な才を認められての拔擢であつたことを物語るものであろう。大内記は、詔勅・宣命・位記等の起草、奉行に携わる職掌柄、秀でた漢文力が要求されたからである。

さて、諸蔭の現在みられる詩文は、『扶桑集』に一首、『類聚句題抄』に一首のみであるが、詩文にかかわつて、藤原博文との若き日の逸話が『江談抄』に次の如く残されている。博文は、対策及第し、延喜五年少内記（『類聚符宣抄』）、八年には大内記（『日本紀略』）として見え、延長三年には東宮学士として朱雀の侍読をつとめ（『二中歴』）、四年正月文章博士（『二中歴』）を歴任。延長七年に没している。話は延喜二年（902）大内応試に、文章生だつた諸蔭・文章得業生だつた博文の二人が及第した時のことである。すなわち

周墻壁立猿空叫 連洞門深鳥不_レ驚_{大内応試}

延喜二年十月六日_{（注五）}於_二大内_一有_二此試_一。召_二秀才進士等_一。博文

于_レ時秀才也。此句有_二叡感_一。應_二及第_一者二人。博文。藤諸蔭也。

博文補_二藏人所雜色_一。諸蔭亦候_二同所_一。惣參者十人。不參者三人。挙直朝臣云。彼時博文者只候_二於所_一。以_二諸蔭_一被_レ補_二雜色_一也。

口伝云。延喜聖主勅曰。博文詩得_二作文_一。然者諸蔭詩者。每_二句上字_一用_二逸人名_一。才有_二餘力_一也。以_レ之為_レ優矣。仍抽被_レ補_二雜色_一云々。

（群書類従本『江談抄』による）

と伝えられている。『江家次第』_{（注六）}にもほぼ同文の記載がある。

博文の件の詩は『扶桑集』卷七に「山無_レ隱詩 七言八韻。每句用_二逸人名_一」_{（注七）}とあつて現存する。「每句用_二逸人名_一」は『江家次第』には

「後漢の逸人名」云々とあるごとく、この日の応試には、後漢の逸人名を句毎によりみ入れるべき条件が課せられていた。しかし、前掲の

『江談抄』に「有_二叡感_一」と記され、『江家次第』には「博文作_二秀句_一」と記される博文の現存する詩は「後漢書」逸民列伝に見える

隱士の名とこの詩を照合してみても『扶桑集』の欠字の部分を除いて十六句中、五句、光・周・春・平・長・陰・鳳の七字が共通なだけで「每句」というには程遠く、疑問の残る旨（『類聚本系江談抄注解』）

藤原 挙直 考

福井 迪子

一 はじめに

『江談抄』の「輔尹挙直一雙者也事」の項に

又被^レ命云。輔尹挙直一雙者也。匡衡送書於行成大納言許云。為
憲・為時・孝道・敦信・挙直・輔尹。此六人者、越^ニ於凡位^一者
也。故共甘^レ貧云々。

(群書類従本『江談抄』に拠る。)

とあり、藤原挙直は藤原輔尹と「一雙者」とうたわれ、いずれも当代
の「一物」^(注一)といわれた詩文に堪能な為憲・為時・孝道らと共に「越^ニ於
凡位^一者」、「故共甘^レ貧」^(注二)る者として語られている。

過日、藤原輔尹について述べた時に「一雙者」たる挙直の詩文にか
かわる一端についてふれたが、改めてもう少し詳しく述べたいと思う。
従って前稿と重複する一面のあることをお断りしておきたい。

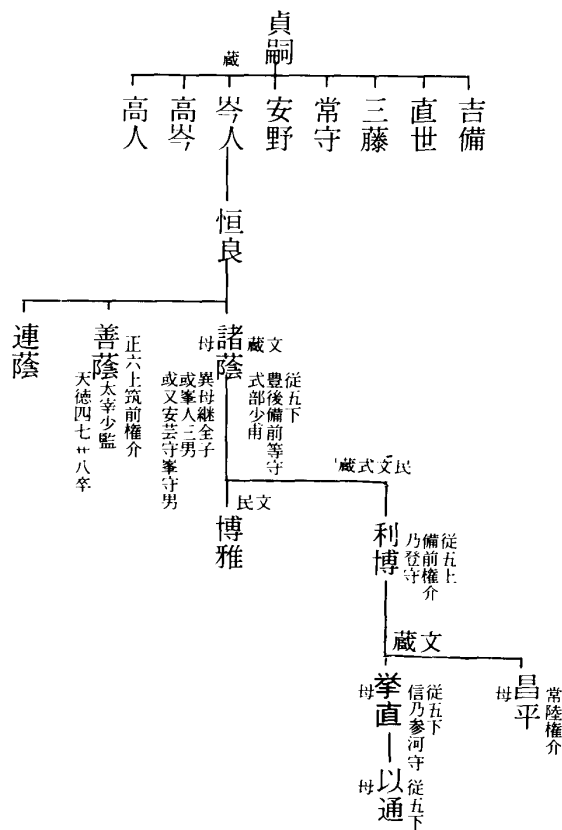
挙直についての資料は少なく、十分な考察はできないが、一条朝を
中心とした漢詩文の世界の、隠れた担い手の一人であったことへの理
解とともに、文章生出身の一受領層の実態を見る一端ともなれば幸い
である。

二 家系

藤原挙直考(福井)

まず出自についてみれば、その家系は左大臣武智磨四男参議巨勢磨
の息男、貞嗣の末裔である。

『尊卑分脉』から系図を摘記すれば次の通りである。



父の利博は、従五位上・備前権介を経て天曆十年(956)ころには能
登守(『類聚符宣抄』「天曆十年七月一日見任」となっている。

『尊卑分脉』には「民・文・式・蔵」と記されているが、それらの任
官の年代は明らかでない。ただ、文章生出身であり、前記の能登守の
在官時から考慮すれば、恐らくは村上朝の蔵人であつたろうと推定さ
れる^(注三)。

祖父諸蔭は、家系の中で最も注目される人物である。系図に見られ
るように文章生の出身で、蔵人を経ているが蔵人の任期については定
かでない。しかし、貞観元年十一月十九日に従五位下に叙爵した人々